



^ 5
2129



門利5
冊 2.129
卷

水徳の風をいぬ東氏の徳を味はれ
之を白きしとくらししはけし
初学はあやに集西編りし集也
四序の意物ありし歌也新志に
句をいりしを新志に記すは月氏
初より撰む静のわが校合の力を
しる者からしといふはぬ物
田舎の白紙よりかきし初志



聖
藤野
氏寄贈

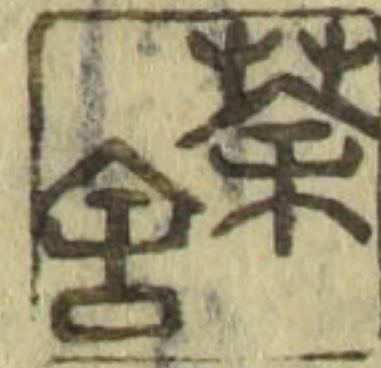
種也一鳴けりり也みらふとてあは
まらふ葉むさよ柳にこるよのしん中
けうまはれはくしんのもくろくまも葉
まはれの勢をたきく一年の終り
ゆくとてあはれはくしんのもくろくまも葉
くれなゐのつる葉まはれ印のもし葉の
権とむらあめをてあはれをくわりて
まはれを事したゆくとてあはれをくわりて

大ぬいぶと葉くしんもつ柳や汁も
あはれ秋もあはれもあはれもあはれも
月にあはれもあはれもあはれもあはれも
後ふれあはれもあはれもあはれもあはれも
まはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
のまはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
かまはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
あはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

和漢可月の事成候事

梅菜抱梅人

寛政戊午初冬



[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]

序 二



序



北総 油田山 奴東武青山
来云 茶乃友と悦ふと久し
事終古 端の土産文も一集を
編み 糸茶すいと 紙形にて作ら
き 也起りも又 何あらく 今年

小冊ありぬ名はけり亭田毎の日
 と以ふまき日影程かやらん
 ことばは

三世太白堂

桃隣



序

二



春之部

正月

大暉帝 勾芒神 蒼天 東君 青陽 韶光

大簇律 立春節 雨水十 孟春 初陽 臘月

朔月 睦月 祝月 太郎月 初空月

元日 八日 田毎日 日こも 照り 七草 七草

元朝 三朝 元三 三始 元旦 正月 雜旦

改旦 新春 年頭 年始 叔氣 復新 新年

前年 改年 聖節 履端

四方ノ春 八聲ノりりくく空ハのりるる一ノ四ノのり 正 桃隣

今代ノ春 君ノまま由代のりまま糸のまま省の春

立春 今朝のまま年をのりくく 新年 去年 今年

初空 七草ノりりくく 柳ノ吹く 柳ノ風 正 桃隣

初雞

初雞のうらや都のうらやけをたらぬ 挑北

四方拜

四方拜のうらや天比呂の山凌ぐけしひ身災を抄に空社新納

星佛

當年星の九曜是と歳初の登り滑替雜談と奏し

苗田

苗田のうらやかちふりはふ量るぬ 挑如

御薬と伊

御薬と伊のうらや白散度端故

屠蕨

屠蕨のうらや切るるを元のはえに 挑如

椒拍酒

椒拍酒のうらやえりて用ゆるし事支類聚のうら

六

山椒の酒あり

朝賀

朝賀のうらや奏賀奏瑞小朝拜朝賀のうらや外侍のうらや

元日節會

元日辰の別は天皇大極殿の行幸ありて行そり公事根源のうら

元日節會

諸可奏公事根源のうら

七曜御營

七曜御營のうらや日月火水木金土の七曜のうらやのうら

春

氷ノ様

去年氷室に納る氷の厚薄と奏

腹赤

鱒とて魚とてうらや筑紫より奉じ昔へ節會は供りて

國極奏

言野の行幸の時國極人集りて一夜酒と奉り哥とてうら其後

院拜礼

一日院寮の人々院御所を拜礼するに合符抄と奏し

祇園別掛神事

元朝寅の二天の行之

年徳神

年徳神のうらや新く運ぶまのうらや 挑賀

昆沙門羅經

昔へ元朝寅の時訓讀をうら雑談ゆと奏し

若夷

世は若夷やうらやをらねるも若夷ひま 山峰

夷廻

民家の門くとうらひ舞て嘉祝を

春駒

春駒のうらやうらやうらや山交うら 十調

鳥追

鳥追のうらやうらやうらやうらや 石二

傀假師	鬼と出と教佛あり傀假師	馬花
猿曳	猿曳きの時波ふかき或禱うの	一士
門神棚	多れまある夜明を門や神の棚	挑水
門松	月雪の多れありちと一門の松	本末
立松飾松竹	繩藻炭海老掛鯛	
流連飾	水き根と今朝や多のらん柳葉	柳門
橙	橙の敷や旭一浪連は霜	里雀
若水	若水も多根汲ひては居る	挑隣
包井と開	井花水若水桶	
若餅	若餅もちやとやそれ若餅酒棧	知道
雑煮	いづ雑煮の味もまらざる雑煮うれ	雨光
蓬菜	蓬菜も中も白き米の足	石こ

喰積	押鮎	うもの子	野老水祝の品畧
葩煎賣	金くのこと	やとせの表欠	木志
双六賣	若やまき	刀六りや箱の箱	桃聖
年男	松も	川馬はら	年男
庭竈	敷	あや	庭か
福藁餅	正月神	と祭	不洋と除る心あり
福流福鍋	紀事	白若水と汲て煮	福流らふ福鍋と用鍋あり
大ふく	元日	茶と大ふく	大福と云ふ中
餅打ち	黄帝	の亡るふ	虫を眼のむと准やとく世諸問答を奉
初子	きり	羽子	や隣へあ
破魔弓	くは	らの飾	やと

胡鬼の子 是皆夏蚊は喰ふぬ呪と云

桃屋

福引室引 昔福引を餅と入る引合を借りて雑談抄より

弓始 心虫とく人のつらきもや弓とくしめ 宗瑞

馬騎始 のり神を残りてたぐり馬場の雪 銚声

湯殿始 穀おの福あ忘りり茶切なき 酒好

飛馬始 梅々香も本一初湯の風呂付口 笛口

着衣始 梁塵抄正月始馬場殿おと馬騎飛馬始三或目秘説

船業初 きとくしめ海軍の表表抄てえん 如泉

舟玉祭 のり神の形唄着し改さくひ 女介

辛木 住吉の社お側舟玉神とてり

重箱菓子 門松お根立る木あり

三物道哥 門松お結び付て供物と此内へとる

同俳諧 裏白道哥 同俳諧 歳旦開

初夢 神夏夜やそんれとまると津の枝 静江

初曆曆開 化粧しそ母のしりく響るれ 雁戸

筆初 海山の茶や茶籠のくすし 石二

試筆 吉書 書初 吹初 舞初 松ハヤシ

謡初 松風とさうぬ夜も何り溜神 挑五

千壽万歳 せん果多やこもるき光の寿 一士

初賣 初商 買初 初店節 帳用

節振舞 朝節 夕節 節小袖 松内 初芝居

おさうり 元日よ降雨をいふ

いひけむ いひけむや恵まよかしく時まら 春蝶

お祓り 正月の麻紀とてり

水祝 くらま真聲よ水とけり事あり

けしき女賣 元日赤き袴など紙符をうゝ祈嫁聚

桃笏 桃板 桃梗 仙木 神茶 鬱壘

唐より神茶鬱壘二神の形を画て元日門は張凶鬼を防

畫雜貳戸葦索唐より雞を画て門戸の上は置葦繩をひきて百鬼を防く

如願 唐より如願と云女糞壤中へ入るる者依之令如願と云ひたり

葭灰飛 立春の日何の灰を壺に集め至る府自れを

春盤 立春の日春の餅を葦と相送ると云ひたり

春燕と戴 唐より燕を作り彩て立春の日うゝ

初子の日 雀 鳴くや子け日けひの小松原 風馬

初子け松 小松引 子の日松 初子のまの玉葺

初寅祭 上の寅日鞍馬をかき

各御 多へしはる 縁川人や各御決し 桃曉

初卯 上卯の日佳吉と云ふ事なり

卯杖卯植御杖 上の卯の色々を本と切結ぶると云ひたり公事根源

愛宕寺天狗安 二日の夜つらめをいと集り其まて後寺の門戸を叩くと

二宮大饗 二日公卿以下参りて拜礼後饗ははくあり

朝鏡行幸 二日天子は幸ゆ上皇母后の宮へ行幸あり

臨時客 二日摂政関白家小初春大臣以下上達部を招てはひり

履新之慶 元日は賀も詞あり

たぐ御く 延喜式より瘡万病膏と云ふ

叙位 五日或六日諸臣の年勞を奏し位を次第に叙する

人と帷子貼 七日唐より人と画門戸を貼す

七種 七修け縁の松ふやゝる乃皆 桃翁

若菜 下等ことけ若菜の若菜の若菜 宗瑞

齋

霜降きくまや夜明の華炎

桃 兩

磯菜摘

もれおきききくまや夜明の華炎

桃 一

かくき掃

くまききききくまや夜明の華炎

人日 靈辰

七日正月

白馬節會

七日あまのりやち申すけ美 公事根源を奉

菜摘川神事

七日吉野勝手の宿神より

真面宮

七日夜撰の真面山にて富前とはく

御齋會

大極殿にて八日より十四日まで最勝王証を講せり

真言院御修法

八日より十四日まで行之宿直くはれり神事

太元師法

八日治部省あり七日行之

女叙佐

八日女の位階と叙せり公事根源を奉

女王祿と給

八日女王祿と奉り公事根源を奉

常陸常神事

常陸国鹿島神社にて十日男女の常名と書て神前にて祈

居籠夷祭

西の宮にて行へり居籠へ九日夷祭ハ十日

縣石の除目

上早より十言まで外国の人と召て任官と授け諸国の受領を任

御齋會内論儀

十四日由舟の結願にて南殿にて行之

外記政始

是ハ吉日と撰く行ふ先九日ありきあり

男踏歌

踏歌ハ十四日女踏歌ハ十六日公事根源を奉

三毬打 左義長

爆竹 吉書揚 菱葩 何ら

細虫

大經と引合て勝負を付吉凶を知るあり

上元

十五日の事あり

御薪 十音百官悉くお供をまうて宮内省に納らるる也
粥木粥杖 枕巾子十五日かおの本として打事らるるは袂衣粥杖とあり
小豆粥祝 十音是を煮て天狗をまかれ年中の邪氣を除くことあり
平園御粥 十音河内国平園の神前あり 三保祭 十音駿州
獅子頭神事 十六日伊勢山田より
土竜打 幾内少て十四日此事あり
賭弓 十八日天子弓場ありと申候もろく
厄神孝親民將來 十九日八幡の厄神へ参り札と水て帰る
吉田清秘 十九日お夜あり 初不動 初天神
女節分 十九日とて吉田の厄神詣りあり
具足鏡割 流るる 所代や具足之鏡より 可流
二十日團子 廿日京師の俗家毎こころを食む廿日正月とあり

煎餅繫 廿日とて江東俗紅の糸と繫家の上置事あり
伊都波嶋祭 下文日官幣有近代断絶といふ
丹宴 廿日仁壽殿ありて行る文人題とあり詩と作るもあり
御忌 廿日法然上人の忌日あり十九日とて廿日の間知恩院法堂あり
福壽神 能光の忌とて好も福壽神 五惜
東風 東風やとてとて明一室の窓 朝虹
淡雪残雪 宛あうり麦の雪とて一室の窓 朝虹
雪解 雪解や洋殿さすは石の上 木水
氷解 解れうり流るる小田の氷とて 左來
凍解 凍とけや小蟹のこころ 眠鳥
雨水之節 奠氷のちる 頼奥を祭 桃種
木芽 赤むれとて木の芽播あり 数るる 玉丸

下噴
 若芝
 鶯菜
 芥
 若叫
 芥子着葉
 落莖
 松の花
 土筆
 畑打
 畑をゆく
 若緑

下り人や大根のけしきの中
 若芝や掃きぬも寺のお庭
 梅の枝は深へく遠く人常菜
 芥搦や門田よりつる三日の月
 若叫の聲や鶯のこゝろに
 芥子とわたりハ芥子のこゝろに
 山陰やりのつらき長き松のた
 十かへりおとすやえとく松の花
 まとくと搦やつかみやつし
 畑うちや土砂のこゝろに
 畑をゆく種物 山椒皮 雜菜摘
 凌や松も柳もまらき
 春水

雁戸
 可笑
 菜園
 挑霞
 楚室
 淇園
 丸秀
 里時雨
 其角
 山奴

餘寒
 萬春樂
 子日夜
 山笑
 鳴鳥狩
 鈴こころ
 經尾
 猫妻戀
 白魚

布晒 水の煙りは竹葉の
 春鶯囀 梅枝をきく 青柳をきく 大芥をきく
 梅花衣 鶯衣 鶯袖 柳衣
 くらきおと多し 山中きく 山樞 乙由
 泊り山 朝鷹
 泊り山野山は出て宵は雉の鳴所と聞置明前行鷹は雉
 と取すも泊り山も鳴鳥狩も朝鷹も
 鷹小掛する鈴は鈴子とあそび鳴るをきく 雁鳥とく
 狩は行あり鳥と驚くさしとの義也
 鷹の尾は雀の羽とつとつ今式より
 踊るはかひひそめてや 猫は針 藜太
 松明清くは舟籠ありふ笑え 可笑

佐保姫
初霞
霞
長閑
水めらむ
雉
鳥囀
百千鳥
鶯
うそ
駒鳥
雲雀

佐保山の霞は色よ寄て春と染ふ神とよ
 明てえれは田わり山ありとらふ
 のれきては比良の泉あり文とよ
 のくさや紙衣てくる尼とよ
 ろめらむ小川の春やけりま蟹
 羽風よ替へる一雉子の声
 萩海より船ももや安徳道に
 八雲御抄曰鶯は限らむ百千鳥の囀と云堂上詠る例ありと
 堂の隣へ飛んてとらふとよ
 鶯
 約とや任別と鳴く沢の春
 疾風よ力らるる砂とらるる南
 野水

桃五
嵐雪
燕尾
桃篠
桃隣
桃雨
里川
手代
古
桃

春
八

永日
梅
柳
椿
玉椿
春雨
菅
三葉芹
独活
防風
烏芋
山葵

永き日や 謡やよきとよ
 梅一とん一湯酒のわらうとよ
 椿湯の所りとのふれとよ
 木の下の花よとよとよとよ
 八云代竹玉椿とよ
 疾風や雉の巢はとよとよ
 菅畑やう梅よ葉売の種所
 砂川やあふるよとよとよ
 美まよ一ふさふさやとよ
 防風や外よ塵おき砂地とよ
 舟戸湯よとよとよとよ
 雪氷よはらふとよとよ
 桃五
嵐雪
燕尾
桃篠
桃隣
桃雨
里川
手代
古
桃

燼菜 摘残セぬ菜の秋も浅くも 三習

鱒鱒 鮒膾 初鮒 青饅 丁鱈 目刺 飯鮓

浅蜷 蜆 ず蛤 海雲 若和布 ひしき

海苔 妻印りり海苔 煮くまの日向火

春風 麦風や之もももき夜のみ

風光ふ 麦ふりハ夕日よ風のひより

本地炉縁 小屏風の墨染ふりより 本地炉縁

春の宮 東宮あり 儲君の御所あり

霞の洞 貞徳云仙境とあり 院の御所とあり

桃雨

桃心

燕尾

二月

史鐘律 驚蟄節 春分 仲春 陽中 如月
今月 きまき 記梅見月 小艸生月 初花月

獻生子 唐ニテ二月朔日青き袋ニ百穀瓜李の菓種を入れて送と云

初午 ろん年や賽銭よりハハタケ居ふ 其角

水間孝 泉あり初年の日群集を土産に草薺を得

東福寺懺法 六時よ六根の罪を懺悔する法あり

本妙寺詣 近江あり初午の日詣も

摩耶齋 振初初午は近国の人専ラ飼馬の無難を祈るに馬を曳齋

占野の餅配 一日諸人配り候ふ

行基齋 二日抄石河原郡昆陽村昆陽寺ハ行基の関基あり

二日灸 紀事曰二月二日男女各灸灸を乞と二日マイト、ふ

叙奠

上丁の日大學寮少て孔子并十哲の影と祭る事二月八月
両度りとも叙奠といひ春あり

二月堂の行

南都東大寺少て一日より十四日迄行テ七日十四夜牛玉と貼せる水を取

春日祭

上申日大中納言の中無攝人上卿として前夜京を出て南都へ趣く

新能

七日より南都真福寺の南大門へ新能始り十四日迄

大原野祭

公事根源曰春日本社遠きよりて都近き所へ移るるに有春日祭同

園并韓神祭

延喜式園神一座韓神一座と有るなり今荒神と云ふ

祈年祭

四日太神宮以下三千百三十二座の神を奉りて豊年を祈り云

祇園御八講

拾芥抄に今絶へて沙汰ありといふ

遺教経

徒然抄に千本の釈迦念佛といふ事ありといふ

涅槃會

涅槃會令りて後を移るるに有る也 遠及 桃處

佛のころ

二月のころよりいふ 聖のころ

常樂會

十五日南都真福寺より

嗟峨の柱炬

十五日清涼寺釈迦堂の前は大明松ダイメイ西基建

餅花奠

京師或は幾内の俗涅槃會より奠りて供物といふ

積塔

十六日盲人檢校以下清涼菴に集りて修す

貝寄

廿日前後難波の浦へ寄貝と拾ひて雜談抄に委す

踊念佛

彼岸の中日は撰及四天王寺少て此事あり

圓宗寺最勝會

十九日より廿日延久五年に始るといふ

聖靈會

廿二日聖德太子の御忌日少て天王寺に法事あり終日伶人の舞あり

浅間祭

駿及浅間祭廿日

北野御忌日

天満天神の御忌日ありて吉祥院少て八講あり廿五日

比良の八講

近江国比良高めて行之

道明寺祭

廿五日河内国雜談抄に奥の天神といふ

季ノ御讀經

公事根源曰二月八月大般若經を百誦して講せり。

時宗踊念佛

立條の西御影堂あり二季の彼岸より踊躍せり。

社日

立春の後芽立の戌の日あり是唐めて立穀の神と祭る日あり

社翁雨

社の神奮水と食せり社日ハ必しも雨あり是と云

治聾酒

海録碎事社日酒を飲ハ耳遠きを治せり

彼岸時正

彼岸の世と流の声 花曇り

桃玉

苗代

苗代小川にや 淡き家上川

桃隣

苗代菜更

苗代へ菜更なる菜更なり田のむら

大夢

水口祭

本朝食鑑曰農民苗代水と水口と祭る

種井

種井種

静江

藍蒔

藍蒔や 照ねと水比の料は久

春蝶

麻蒔

麻蒔や 照ねと水比の料は久

春蝶

春十一

廠

〜の日は和ら

桃賀

狗背

〜のさ〜と延上る古根の南

桃條

蒲公

〜の花さ〜あり崖の下

桃一

枚菜

〜の葉のら枚菜式

有志

枸杞

〜の根のら一枚

孤雄

立加木

〜の根のら一枚

其毛

鹿杖

〜の根のら一枚

桃雪

韭

〜の根のら一枚

雁呂

蒜

〜の根のら一枚

山戸

胡葱

〜の根のら一枚

捷子

野蒜

〜の根のら一枚

桃雨

水葱摘

八重垣白沢田の生る春摘

薺の花
 菜の花
 大根の花
 野山燒
 未黒湯
 角組芦
 草かぢき
 蓬摘
 接骨木花

又そんくの門は咲くありやうね
 尾寺よ唯菜の花はちる徑
 子やうりつく畑のはらうや花大根
 本名未祥春女兒是髪結ひてらう
 又のふやや又知ぬ畑のうらまも
 山やくや何とさるめをるの声
 神中抄白もろくは畑のすく馬
 雑談抄白初生黒き芽のそつ又野燒
 末の寒きかり初の花や芦の角
 土あうて畑かきき水をうね
 らうぶ摘摘めはらう又の香
 めこことお花の白ひや畑さうい
 桃舎
 言水
 山奴
 桃祇
 其毛
 桃三
 棹翁
 雨夕
 春蝶

銀香花
 若紫
 紅梅
 八重梅
 初櫻
 彼岸櫻
 初花
 花と待
 接木
 燕
 燕の巢
 鳥の巢

咲付はあうもいづのをもけ跡
 能くはら若むらうきハサうぬ
 紅梅は娘もはらまら妻戸らうぬ
 津地は古き接木やハまの梅
 初雨のまらけはまらうらう梅
 接木中ははらうんさうらの梅
 花とす川大え人のをけうぬ
 古郷の梅とらうあうはまら梅
 ほらうらうはまらうらうらう
 燕の巢や町並のあう梅
 園の夜や巢とらうはらう梅
 可笑
 石呂
 杉風
 牛眠
 桃水
 一河
 桃窓
 木水
 木那
 和恭
 鳥

顔鳥

連母新式ハ翡翠翠々

鶯鳥

或説曰、鶯鳥ハ鳥ノ一物ナシ、何鳥ト云ハ定カシキ也

帰雁

子ノシキヤ、海ノ級ハ中ノ一、帰ル、
天子御狩ノ雀ト百官ノ給ト云又鳴声ト云又引テ帰ト云

引雁引鴨

春ハ帰面ト云ト置ハ其友ヲ引テ帰ラセト云説アリ

松じり鳥

葉ノシキノ類也、小鳥アリ

雀の子

折サケカ、あ〜ひりり、雀ノ子、
呂仙

孕鹿

〜〜み、鹿ノ角、あや、系ノ家、
司山

鹿の角落

鹿ノ角、捨テ、あ、日ノ月、夜、
百川

蜂の巣

比、ひ、一、蟻、奇、居、虫

蜂の巢

蜂ノ巢、と、放、と、ぬ、朝、や、雨、木、
喜、久

虫

菜、曾、け、ま、さ、も、や、枯、あ、
桃、霞

蛇穴と出家

蛇、穴、と、出、く、〜、〜、花、の、日、和、く、
有、隣

蝶

〜、〜、〜、〜、〜、
桃、五

田螺

濁、り、江、ノ、浮、上、り、
挑、種

馬刀

〜、
魏、子、取

蛙

声、と、〜、〜、
羅、仙

几中

人、と、〜、〜、
桃、隣

蒸鱧

今、踏、〜、〜、
其、毛

初雷

月、今、仲、春、の、月、雷、声、と、
始、て、雷、と

葛ノ若葉

菊ノ若葉、
菘ノ若葉

出代

出、代、や、〜、〜、
桃、雨

陽炎

〜、〜、
桃、玉

糸袴

〜、〜、
陽、鏡

臘月

山の麓へ雁一声や終る月 五兆

二月

姑洗律 清明節 穀雨中 李春 竹秋 弥生
病月 櫻月 花見月 春惜月

經供養

二日撮及四天王寺より

寒食

清明の節は前二日と云増山井委

榆柳ノ火

これ寒食の後りものなり

杏粥東粥

寒食を用ひし事 郭中記あり

青精飯青飢飯

寒食は揚桐の葉と取て飯と凍て食ハ陽氣とたたく

桃花粥

金門威節日寒食装萬花興煮桃花粥

上巳

日本記上の上巳幸後苑曲水の宴なり 宋書上三日を用ひて

重三

巳の日と不用なり
三日と云あり

元巳上除

巳日拔

須磨御拔

桃花節

桃ノ酒

白酒

草餅

雛合

踏青

油花ト

曲水

暮春の抜元巳の時ありん戊巳の巳也

周の世より起り魏の世より三日と用の水辺より抜

これハ源氏須磨ハ在江の時抜より物を詰らり

三日と桃花と酒と慢して飲ハ百病と除

聖の絵も唐よりいこいれ 下總油 山 奴

ふさげよ白紙 正 山の 赤 桃 雨

咄りちのよと教り雛は花 里 雀

唐の明皇清明の節と雛合より多し事文類聚よりたり

蛤よ沖よ汐テとむふの 棚 正 桃 隣

唐の俗上巳女提ハ鳳もるとり

二日藤の花ととりて油と水中へ浸して占り

さうりきとくまハ風らりるの上 燕 尾

御燈

鞆對

汐テ

蛤ハ

土佐海硯石取

石山祭 三日

修學寺祭 廿日

安良日花

藥師寺最勝會 毎年七日最勝王經と講とる

泉涌寺開山忌 八日拾芥抄曰神修上人のありて建立り初ハ法輪寺と云

吉野會式

子守勝牛兩神輿本堂へ渡御一切經修行

天子の北斗へ燈明と奉りて

繩と木より架と立玉其上と座と立てて繩を引動し

く持ち奉り

のほり帆の流路とありぬ汐テ式 本來

捧の先とて突て蛤のゆる所と知る

三日汐テと取あり

粟津祭 三日 一乘寺祭 五日

水尾祭 九日 高雄法華會 十日

高雄ハ法華會やまのよと云へきと斯云てやと云

礼拜講

十三日敷山

石清水臨時祭

公事根源早辰日試樂あり舞人仁壽殿の元より音楽あり

稻荷御出

中吉日御旅所油小路七条の南より二の卯日還幸

善導寺忌

智恩寺中善導院より

祇園一切経會

雑談抄曰富世沙汰あり

鎮花祭

公事根源曰これハ太神袂井の二祭と云春花の頃疫神入

壬生念佛

おろしき壬生の躍式 哥流

壬生ヤウツ

祭別より壬生念佛十四日あり廿四迄有る主人祭りと稱す

千本念佛

千本引接寺の花盛より 比良祭 十五

梅若系

隅田より鳴く榊林一や梅々忌 藤紫

嵯峨大念佛

紀事曰九月より十五日

勸導會

十五日真林寺月輪院より朗詠注

人鷹祭

十日南都栲本寺の塔より

浅草祭

十日武及金龍山より

御身拭

もろ水よりぬる小ころや御身拭

桃号

御影供

散りてくも桃も白くも影供

桃一

高雄女詣

廿日御影供と修す故に女人登山とあり

順峯入

春大峯より入るあり

小引

飛鳥井雅章卿曰史抄曰春小引の遊ひあり

田原化鴉成

月令に見へき清明節の氣候

花

花の云々清へ上井り浅草の

芭蕉

櫻

世れ中より之日えぬるも櫻あり

蓼太

桃
海棠
萍生初
李の花
杏の花
林檎の花
梨の花
棠梨
東の花
小梅の花
石榴花

櫻は名類畧も
白梅や常もあまの久
海棠の清く木も朝の夜
うきうきお二葉や清く水の上
宵更に眺ありり花を
蟻けくふらんぞ咲りり古壁洞
水舟の里やまんなこの花さうり
明も陽よふまもを葉の花
やほあやあき花よ夕風
葉かろひよまき花のさうり代
和漢三國會庭梅と出ると同き平
る楠花やまき山の行者堂
露橋

蕪枳花
楊梅花
馬酔木花
木瓜花
木蓮華
辛夷
長春
沉丁花
躑躅
令法
藤
通草花

山留けもあまの花や日のうら
やほまのちる日や風の緩まう
木の影よあまは咲りり川の岸
木瓜咲や酒桶波か濁りり川
山鳩の清く鳴ちり木まんけ
巢よりりて蜂の群まるとあ
あまやあま折ありよ花の穀
もうあの中よ白くや沉丁花
日のうらあま山よほしの盛り式
藻塩科よ日ハツミリとよまの
台ありの花さうりよ松の松
大和本州日あびくう蔓草あり

握翁
桃祇
桃中
桃三
桃祇
山奴
雁戸
桃紅
雨光
松婦

こつめ花	雪室の末れ宮の月や小米花	双羽
小手すり	小手ゆりや日も勝げは春の陰	挑舒
山吹	山吹や清水流るる岩るるら	挑處
連翹	連まきやや左平結込し垣の面	春蝶
高麗菜	こほきくの花は由りやゆら小蝶	全
春菜	まきくやや分根はさくは咲かす	全
仙臺萩	野のさやや仙臺萩のつれをさけ	桃徒
春蘭花	和名ホソリ蘭は似て小あり山中は多くあり	
東菜	雑談抄曰高麗菜の別種なり	
九輪草	上よのこも流るる花や九輪草	吳仙
金鳳花	大和本州曰河骨の花は似て毒草あり	
丁子草	花は咲くくさくさなり丁子草	雨流

化偷草	わけひちるすの草やをよひ福草	大夢
華蔓草	畔をけは花さかすむきまうん	挑雪
金盞花	紫とれは花印し川あり金盞花	挑雨
母子草	鴉のふとほつきま流るる花	挑祖
馬蘭	葉似薙而長厚三月開紫碧花	
櫻草	水打もなすき久ありささる草	梅魚
莖	流るるもさくすく摘りりまうる草	嘉月
薊	かりぬの柘植のりさくさくさ	淇園
立形	うへま田は一畝は馬しけんけ花	漱石
蓼花	まももも牧はゆりけははる草	文阿
菊分根	生さるるもあはれまきくはる根	春蝶
奈毛美	花は皆のさるるを云神有蛇まきくはる人此草は丹を治す	

若菫竹
若菫
柿の花
柿の葉
茶摘
三月大根
弥生山
雲入鳥
鳥屏
麥鷓
櫻魚
櫻鯛

塵掃くく又わん若菫竹の葉は
 まく若菫竹からわん若菫竹の葉は
 花と若葉と両説らねと桜花とさあや
 山畑の葉摘もかきふ夕日
 五月日の青もくもや麦の新大根
 朔風も海生の山とありまうり
 まる一ッまよ入きり麦の山
 落し追うれく川く降るも
 麦うほくもや時未れ若菫竹
 常及桜川の浦ゆく白魚は似る魚とふ
 青菫竹一鱗のちやさく細

桃谷
藤紫
桃雨
重カ
冬嶠
梅松
桃水
一河
桃霞
商醉

櫻鉞
櫻貝
柳籠
若鮎
上魚藻
蚕
新柔摘
鷹の巢
呼子魚
引残雀
八八夜
忘霜

は別湖中より多く有り
 以底よ赤き又ありはく貝
 水とこの流き川や折く人
 若鮎や海濱は又や松の影
 ちる花もむさく葉と一葉り葉
 飼人の腹とくく蚕うか
 若うびるもあく摘りり葉鳥
 和哥三鳥の傳のうあり
 二月引て帰る雀の引残りあるも
 霜くちる花や八八夜
 野伽汲んで帰る山路も忘れぬ

孤雄
里雀
里川
亀槍
亀文
三子
雁戸
野雞

炉炬燧塞
 くらたち
 める時
 櫻衣
 春湊
 復迄
 復と待
 暮春 行春
 春惜 春限
 三月盡

くらたちのくわいハ廣一軒の菴 陽雨
 くらたちやあまの峰うけよ山はあ 一河
 俗は蛙の啼く頃眠りと催まを云
 山吹衣 裏山吹 はくし衣
 新古今抄曰春の湊へはゆり事し春の集る所と云
 裸ふもえく。湊也復ちりし 静江
 復とやうのえくをり扇 折 藤紫
 著ふあまの湊の集るもその真 桃處
 字のめぬ山風よまはちりり 其毛
 木は風のやふれてまはる砂 三蘿

夏之部

四月

炎帝 帝 祝融 神 昊天 朱明 蒸砂
 仲呂 肆 立夏節 小滿中 孟夏 躑躅 余月
 乾月 卯月 卯花月 花残月 とととの月

更衣
 白重 卯花衣 給 綿板 夏羽織
 さひ草
 音簾
 孟夏旬
 筑摩祭
 供氷

扱ふさき合羽やうの衣之 桃翁
 御湯殿記曰五月廿二日ハ女房以下附帯と云洞中のり
 凡俗は四月朔日より用也
 更衣 御殿上掛
 扇と扇と拜あつて孟夏ゆり年中行夏と奏
 一日夫と持し数や鋼とくまき女詣まると
 御氷供申るは四月一日より九月迄也

佐吉卯祭	上卯日	大神祭	上卯日	稻荷祭	上卯日
山科祭	上巳日	八瀬祭	上辰日	平野祭	上申日
江及八幡祭	中卯日	多賀祭	上巳日	堅田祭	上巳日
手安天神祭	午日	杜本祭	上申日	松尾祭	上申日
菅麻祭	上申日	當宗祭	上酉日	梅宮祭	上酉日
大津祭	上亥日	山崎日使	三日或ハ三月有リ		
水屋能		三四音南都春日有	四座の猿樂不勤地の人能と施す		
夢瀨詣留祭		四此両社大和より	大忌風神の祭あり		
擬階の奏		七日は二月川見の時成	運の短冊を式兵三省より	とて祭と大臣奏す	
灌佛		灌佛の日より	しをふ麻子より	ぬくせせ成	
浴佛 佛生會		護華會	佛産湯	甘水	五香水
戒壇堂開帳	八日敷山より				

花摘	八日敷山より	免し	花摘の社へ詣り
鷹馬入	春百首抄曰四月八日	春と晴へくもとくまふ	
山崎祭	八日	清水地主祭	九日
練供養	十四日	中將姫の忌日あり	
伊勢神衣祭	十四日	麻積連とつみ氏人麻と	ま和衣と織て神明も
高野花供	弘法大師の御衣と	取く	
千團子	十六日	三井寺鬼子母神	子童詣て團子千ま
日光祭	十七日	和歌祭	十七日
久世祭	中巳日	向明神祭	中辰日
國祭	中申日	山王祭	中申日
関白賀茂詣	加茂祭の前日	あり	公事根源あり
加茂祭	中酉日	上加茂下加茂	兩神の祭なり
			今日と御取の日と

葵祭 御形日 葵かつし 諸かばら
 神祭 忌さ次 榊取 榊さ次
 三枝祭 是卒川の祭としかくも
 吉田祭 中子日春日社と同形あり
 駒牽 是ハ四月廿八月七各同一日ハ公事根源あり
 土塔會 十日天王寺より
 矢敷 洛三十三間堂は毎年晴天とらから此事を作せ
 松前渡 賣人産物交易の場とせらるるなり
 梅天 孟夏の天氣とす
 和清天 文選より源氏ハ和して清くといふ
 煮酒 夏日酒の氣味とす
 餘花 春よをれて咲花とす

若葉 舟唄の均とみくや夕まき 其角
 新樹 若葉同物あり
 若葉花 餘花と同じく増山の井より出せ
 若楓 色よくび姿アツキなり 若楓 都秀
 夏山 夏山は色翳きまをり病葉と書
 復木立 夏山は色翳きまをり病葉と書
 木草茂 日登りよ海を舟よ白ひ式
 木下開 川水の舟よをり木下を
 櫻の實 實さつとや拾ふ人あきまかす人
 卯花 卯の花や舟よをり
 厚木花 舟よをり
 桐花 舟よをり

野萩 紫笛 風至 雀千 桃雨 山香 紫笛

柑類花	山菅の花	櫻欄花	繡毬花	茨花	岩梨	白丁花	要花	蔞花	天葵	覆盆子
池底もる紀の山里や并こらん	山菅のむや小糸のあひま	呉加桶の水は浮りくさるるのむ	風をよくもすりけむや緑おえ	びつろく身中よ書も何りもあ	岩節しや最家のつねえ地系	流りくるあや涼しき白丁花	うめさく服よ朽まらぬ垣根	竹の節はききや月や夜つそき	うさひの花は白さよ草の根	里の子は馬宮くさるいちとく
白葉	成淵	時來	五柳	嵐雪	一苞	泉々	六支	北秀	五柳	越後 瓜々

牡丹	芍薬	杜若	芥子の花	常盤木の落葉	葵	蜀葵	美人草	鷹爪	宝鐸花	胡蝶花	石藤
山下りて名くさる海一ッほそんが	芍薬や外は都あきすけ座	里は井の名もたのりや杜若	門守の坊佛も浅しけしのむ	冬木の落葉と云	和漢三才圖會白山州加茂山中有三葉葵	咲くる花やあつひの一葉うら	乃端は地花の咲くや笑人叫	昔帯目とよくも道くさるは式	俗は狐の提灯と云ふものも	俗はあくまはくさるやあがむむ	いとあぢけ蔓よはるるや芥のき
梅翁	東閣	桃翁	珍碩			越後 夫成	山香	桃流		春蝶	泉貝

いちぼう
白及
風車花
羊蹄花
鴨足草
石薺花
蘭の花
茶挽草
王孫花
夏枯草
玉卷草

いらふや草科積し花の跡
あらん植くまきと荒れは数葉を式
垣よまき寺の小庭や風くふま
何人の住くや戸のりりし
きくくくまきおろし草花
おれ綴りまたかく白くまの
時珍説の石薺の軒下ま耕て愛まは是のや
蘭のむやまき織くまにまき
花ろよ白くまき草花
和名沼波利久佐又云豆知波利
揚土の上にかまきくま不
まきくま草のうま葉の南

世好
瓜夕
呉仙
旧篇
重磨
桃戸
石二
吐貝
不及
古友

玉卷草
菊
篠子
菅藁
蓮の浮葉
蓮のくわ
綿壽
麥藁笛
麦秋
麥類
桃紅

玉巻草は玉巻くくまを流る
葉やまきくまの葉の主
説文曰篠小竹あり
あまきりくとみまき果や菅は藁
ゆきゆきくまのうま葉を式
蓮の葉をくま取食和名抄并奥義抄
山のけや綿壽のむまら加
まきくまのうま吹りまきくま
麦秋やうまの白ひやまら内
おれまら葉の類やまら行の子
まきくまはまきとまら飯の庭

古水
三從
桃瑞
泉々
山井
桃賀
順馨
利牛
芳紅
桃紅

時鳥	横吹を横吹一一声はゆるき人	桃隣
閑子鳥	若葉のそ秋よこそ似ゆらん古多	桃隣
飛蟻	はらひまきく風よ吹きて好蟻哉	哥詠
蚕のこ	光陰よすもとありり蚕こりぬ	素口
蚕薄	和名三蚕と養ふ言ありまもはほしむるよ也	和漢三圖會
枝蛙	雨もくく鳴くや夕日け枝もん	五柳
蟬の子	蟬の子け在り下ふるゑるうね	山香
蟬子	續頌圖經曰蟬の類今人以爲食品後名蟬かきめ	
蟬鉤	くさ苦はらりて蟬くや蟬つり	野流
初蟬	網りすく汐のちろくや油繼	夕雨
和名子	雨止んく花屋よりり	秘茄子
鹿袋角	鹿の角の和名をふ	野流

翡翠	かりきとや鹿根けかきむ	枕のえ	桃紅
扇	陸えはうらうらよかきんあききうね		吐貝
團扇	門へあき借合ふ夜のま扇うま		孤蓐
木布	汗拭	汗取	
草物	美長く夕なれまじ	印くく	桃窓
涼	のの裏といと紙くくん夕ま		桃庇
短夜	みしうぢや暮留く寺の枕り		桃雨
日傘	本文はの舟よふあ合日うさう		早秋
綿笠	あこ笠のりりく都りや茶屋のつ		桃霽
新茶	新茶入る好とけ白ひや夕日	和	桃明
炒	米麥と蒸し煎て細末して冷水に浸して用		
新麥	新麥や糠あきかきふ道の料		百客

蚊	子又	魚菜	鮎	津波須	鮮	洗鱧	蟹	鹽鳥賊	子鰻	冷汁	冷麥
鳥	切石	挑陽	知一	漱石	挑舍	挑舍	百和	挑陽	挑屋	挑屋	挑屋
鳥	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角	其角

和漢交圖會目方ニヨリ鹽藏の物語
 和漢交圖會目方月脚の事者其平云又和奈ト云
 和漢交圖會目方月脚の事者其平云又和奈ト云

蚊	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭	蛭
静江	奇童	五岩	挑賀	凡挑	其角	哥詠	故風	千袋	路遊	路遊	路遊
静江	奇童	五岩	挑賀	凡挑	其角	哥詠	故風	千袋	路遊	路遊	路遊

日と森と暮るく時未の改すころを
 此山本や年とともいふは地
 みくど遠く山を渡る脊板橋
 何つゆり池りつるなりぬ
 園の夜や子とも泣物と暮
 編綴ようたはさしや一曇
 故をうけて本質拂らん娘の名
 此あや子と指さすは精は海
 はら結
 本は陰うらうて涼も一五
 路の居る古江涼くは麓の地

青鷺

復鶯

夏行

青山椒

荊葱

馬齒莧

苦草

落

藜

藜

根芋

尊

らやうやうりもあつても歳うらま

夏より流る人や月夜の友を

夏行 夏經 夏花 安居

ちまるとり残る白ひも山椒

らめとるや空や一まゝかぬき細

此の町に掛まゝ馬鹿不入存り

とくきくか日ありと家や城の屋

塵の中よもく入る落くこけ

香小白くふくは音もや流る

やとりせんあつきの杖は成日と

ままをく残る土のりや

尊茶や園栖の義、片手紫

山香

沂浴

五情

橘二

誠可

挑流

孤村

山城

山朝

振鷺

夏七

海松

海羅

汐先の海松のりりり浮れを

海七、ちまよ白く女のりや雨のり

一士

桃尹

五月

雜寶律 芒種節 夏至中 仲夏 茂林
皋月 鶉月 鶉月 榴月 月々月

加茂足揃

一日競馬の試あり

松本祭 一日

献菖蒲

三日月府のやめのとくと南殿の階は東西に立又時の花と折く
同く置くくくふ

菖蒲菖

五根ふきくくをくくくくくくくくくくくく 其角

早瓜供

四山城の海園くくく内膳司早瓜とよる

端午

五月五日と云 端午の形はまきりく 春蝶

重九

五月廿日と云

艾虎

唐より小虎を作り艾の葉子付て頭より頂き邪氣と去るなり

文人蒲人

唐より菖蒲艾をくくく人形を作り門戸の上よりくけする

画天師

唐より天師と名をきて賣事あり

粽

ちりきき、結ふ尺ふくくくくくく 額 髪 くとん

節り甲

湫形く日け 照るかきり甲くく 一河

菖蒲の

結くくくくくくくくくくくく 路情

幟

日和とくくくくくくくくくくくく 五橋

菖蒲引

而くくくくくくくくくくくく 桃瑞

菖蒲髪

菖蒲茶 菖蒲湯 菖蒲俗衣 菖蒲酒

永さ根

母より只永き根とくくくくくくくく 増山井

棟俣蓮菖

おちおち葉葉たひもくくくくくくくくくくくく 櫛の葉と軒喜

薬玉五月の玉

公事根源より五月節會群臣と賜と撮去年九月葉葉以薬玉懸て善御持前

長命縷

續命縷 辟兵縷 五線糸 朱索 條達 何事も糸玉夏也

枕押子御薬玉とて色々の糸と組くくくくくくくく 下畧

五月の鏡

廿八重垣百練の鏡として唐江南の船中を鏡と鑄るも

藥日

廿日とくり

蒸草摘

是百柳と摘あり

競駢

宗祇抄曰五月廿九日馬の争ひは四月に馬の争ひより勝るなり

百柳とくり

是も端午の色々の柳とて今も勝負より良あり

左近真半巻

左近の真半はひひ四百廿根源より

引折

近衛は隨身福の尻を折て着る故にひかりの目と云

競渡

鳥卓水馬 廿日川よ出て船の邊末をくさるゝをひたるなり

印地打

世説問答曰童の小ちを以ていんちとてまるも

粉團と射

滴粉團 水團 白團

是ハ天皇遺事又歳時雜記より

桃印符

廿日彩ふかりのまゝも家文の符と書て悪氣よ増山の井

赤靈符

抱朴子曰端午赤靈符を作て辟兵道有事し侍るるなり

蘭湯浴

廿日蘭をたく入て浴せると今この世は菖蒲の起ぬなり

梟の羹

梟は炙物端午に首官に給えり夏漢史より

鵝鵝の舌と太

時珍曰其舌人の舌に如く剪別も人の舌の如くあり

射馬弓

年中行夏哥合は五日豊樂院を昔騎射を御覽なり

神水

端午午の時け雨竹に瀝るなり

賀茂競馬

廿日人馬 赤方里方として左右よりひて馬を走らすなり

藤森祭

廿日 關祭 廿日 宇治祭 廿日

室祭

十三日 今宮祭 十日 両社祭 廿三日

住吉御田植

廿八日 祇園神輿洗 三十日

生玉流鍋馬

廿日午の刻其装束の腹巻陳羽織と看す

六日菖蒲

あはれ ねは残るなりやめはきまなり 大夢

竹植日 有無日 陽まじしも竹植る日さき養い至 芭蕉

廿五日村上天皇の御国忌あり此日大舟の政事あり又急夏

あまの行りまき夏あけ依てありあけの日記

廿八日丹波の国大原の社へ詣りて云 廿八日伊勢山田大神宮の御田植あり

紀事皇八景我祿成討する日あり故虎御前の泪雨より 清涼殿より行り

是のやしき民よ朱鹽あてりて 五月雨 五月雨の夕や淀川大和川 桃翁

入梅は早や下りてあけの坂名 梅雨 美田りしりしみの青ハ体に入 吾柳

かと思ふ夜思う移る悲なる 吳仙

辻花 とうり出するや坂田の通りを 桃翁

羅 うまもの残る香衣一帯華着けぬ 泥亀

半養生 不く田畑ありらん夏生 十寸

若竹 若竹や日法社より空の先 桃雨

早苗 朝露のまきくはるふ苗あり 山奴

田植 廿二日の青い中うら田植うら 宜麥

早乙女 早乙女や清はまよ乳とあけり 桃雨

田唄 風流のどくめや美は田植うら 芭蕉

棟花 葉は法よりあけり日和結 三習

神花 山はく入る宮ありりさぬさき 桃翁

栞花 児の顔思ふや筆も紫の花板 如蘭

栗花 秋のくもくハ長くありけり 露橋

合歡の花
天南星
山菟子の花
九月躑躅
南天竺花
木芙蓉
忍冬花
瞿麥
石竹
百合
きぼりし
紫陽花

至まてハるさあ門や祈むは花
葉まてく花あもむ好り天南星
くらあーは花見舟より川の流
中やこま入月はくーの夢り式
あんとんの花や教りうく地の系
葉まてー木芙蓉のちりーのこり
あてーこりや着法出人と恨むん
る林の花よぬぬ露のわーこり
さむくこり至合嘆よまりるの宮
きぼりしは下種青ー坊う庭
あちさりや教と小庭の別室系

宝甲
桃賀
竹水
一舟
挑端
挑詠
雨朝
越人
幽堂
挑処
古樂
芭蕉

四葩花
夏菜
朝菜
赤摘花
紅の花
下毛花
かごみ花
鉄線の花
朝露軒
苔の花
蚊屋鉤軒
石首

あちさいは夏あり 萱花一名こま草
夏まきくーや日よーかろ花の足
柳まきくー日除くて出る山花
紅の花とく末より摘物はるあり
ある日や露あき細の紅は花
大梨軒早き木こり四月花開
まの舟ぬかこまみ軒はさうりうぬ
てのせんや夜の宮よかむる地
朝風の柳まき軒てよ日けこり
虫園の夢や本法の苔石のこり
陣中月のかや泊軒よこりこり
る着や流をこりき温る水える

桃号
山紅
挑祇
故鳳
周賀
挑尹
雨虫
挑窓
秋石

花あやめ	花あやめ 懐かかほらりしうか	其角
花びら	八雲御昔薦と陸奥へ花のること云	
直落菊	萩きりけりし酒や志蕪うり	三笑
藻川	藻舟 藻花	
萍花	うき舟のむや小池のちりけり	起石
菱の花	比のまきくそ流こぼれりり菱のむ	古石
粟蔞	稗蔞 胡麻蔞 菽蔞	
豌豆	あんな豆の蔓は附りり城をる	雨明
うき豆引	そら豆と引く流りり里をる	越後 扇風
青梅	青梅のあき青あり雪はた	季月
梅子	日室中け梅子白くや組や	留川
餅梅	梅漬 梅剥	

香子	信濃路の桃とていへて人せは	石袋
李	葉うらやま熟して赤き実あり	静重
枇杷	枇杷の實やゆきゆきぬ葉の茂り	泉貝
揚梅	やまゆきゆきぬ葉の茂り	九声
生胡桃	栗尻ゆきゆきぬ葉の茂り	桃賀
桑實	桑のこけ清水の末を流さる	思經
早松茸	遠近は探さく山や早中門茸	誠可
荒布苳	切替く丹ありそきぬゆきあり	六好
和布苳	朔風や雪は居眠る和布り	桃鹿
越瓜	胡瓜 搦瓜	
茄子	えんじやあかあかとちきり	惟然
新茄和	世人茄子のあきあきけの梅和り	

鱒

絲賣は先くやさくの夕溜山 石二

蟹子

まのく虫 蛇衣脱

水馬

あまはし一花や鼻月の時明り 桃瑞

蟬

曙の襟よらつさとあつ日こう都 桃祇

水雞

馬士の赤くくもふふ鶯や江の界 百和

諸鳥もどめる

水鳥の泉

浮巢

よく又よの草とうこうの浮巢は 桃紅

鴨の子

夕垢離や鴨の子は水凄し 順翠

羽後鳥

つる日は向ひちうや羽めけさ 雪回

黒鴨

悪鴨や花の根くふ雨あふり 思輕

鹿子

破垣やワとと鹿子のさひる 曾良

鵜待照射火串

八雲橋也日矣火は具とらり鹿を間近奇て射あう向く

獸狩

こりのしちて山は鹿とらる時用多

五月闇

年寄け長ふらあし然 竹 桃屋

黒く白く

梅雨中の空合とらあし 桃發

六月

林鐘律 小暑節 大暑中 季夏 瓜期 旦月
遯月 水無月 風待月 鳴神月 常夏月

氷室

胡よりくき、麻よとわく、氷室式 梅人

氷室御調

四月より九月迄献せりと六月五日行要と用多敷あり

氷のちよの氷水

増山井曰御膳や氷と用多と云ふあり

氷室雪同標

千載集に氷室山くくさくを奉る同雪も復

氷餅祝

増山井曰氷餅と氷を准へて一日用

勝曼象

一日撰乃四天王寺愛深明王開帳

不二詣

胡よりくき、麻よとわく、不二詣 橋二

忌御飯と供

一日内膳司より奉る不浄の火とまんちまんと公事根源

一夜酒

移りくる桶のよけ、香や一夜酒 挑窓

六月會

傳教大師の忌日あり延暦寺にて行り、勅使ら

御躰御下

十日神祇官の官人主上の玉躰を御慎み、くさ良と石奏

月次祭

十日六月十五日西度諸社へ御幣と奉らむあり

神今食

十日年の西度より伊勢大神宮を勸請よりて天子神供と供とふ

解齋厨御齋

十日神今食の次は朝より公事根源より

祇園會

海客と人より、下群、成り、紅紋り、旧幕

同臨時祭

十日勅使立

嚴嶋祭

十五日 竹生鳥祭 十四日 津島祭 十六日 十五日

勢田祭

十四日 江島王祭 十五日 伊勢祭礼 十六日 十七日

博多祭

十六日 志渡寺祭 十七日

芦の神輿

毎年十日津嶋より此神夏より

河原涼

四条河原納涼七日より十八日あり

嘉定

十六日紀事曰嘉定通室上六枚とて食物とて是を服

相國寺懺法

十七日樓門にて松風とて鏡鉢を鳴らす

座頭涼

十九日清聚菴にて行

鞍馬竹切

廿日昔峯延和尚大蛇とて亡したるよし

御手洗詣

十九日とて二十日とて 糺納涼 同上

上難波御後

二十日 座廣御後 廿二日 愛宕寺詣 廿四日

橋立冬祭

廿五日 天満御後 廿五日 任吉御後同火替 廿日

賀茂六月能

三日の夜上加茂の神事音楽あり紀夏と奏す

唐崎参

二十日源氏乙女の巻あり今八十日詣とて

節折

三日竹とて主上の御とての手法とて其程折あり

唐崎参

久はにたりとて公事根源とて

大枝

晦日公事根源曰百官朱雀門に集て後侍あり

名越枝

茅輪 菅貫 形代 撫物

麻葉流

麻叶をあげ流とて岸や早の敷 故鳳

夏神楽

を奏する笛も涼しや夏神楽 土若

川社

祢豆お子の祢液りや川中 百和

小蠅毒神

負徳云蠅のかく悪神多きとて

御秋川

糠里とて秋清けあり 桃池

鎮火祭

晦日卜部氏の人火と打て宮城の四角にて祭

道饗食祭

晦日四用四界の祭也公事根源と奏す

施米

米鹽とておちけとて施す事公事根源と具へり

雷陣

雷の声三度高くあはれ大將以下近衛の次將まで弓矢と帯とて御殿の孫箱と候して帝と守護と奉る

温風

鷹の羽はし習 腐草螢とる 溽暑 天貺節

暑

りきふくもやうらうらけりつさ哉

^{世後} 挑流

夕立

夕ちよよおのく月や 松れく人

丈牝

三伏

夏至の後等三の庚と初伏と云四の庚と中伏と云立秋の後初の庚と末伏と云

土用

をき人の小袖も今や七田月

とを流

虫テ

ひーテや寺へ吹込るは羽根

桃雨

露涼

舟よ面くまゝと涼しき夕涼

山蟻

風薫

浩揚を風のいなりや令園寺

百和

青嵐

今日よかゝる洋端理殿の青嵐

其角

雲峯

山寺も岩も負くるままはえ後

桃翁

納涼

すゝもや舟極りの敷はくも

半残

掛香

かけ香も春中合の時斗のる 左撰

泉殿

滝殿 鴛鴨涼 水掛合

清水

山伏の法塔こころ清あう部

百和

さし井

さし井や手織し夏む娘の腔

挑嶺

船橋

さるさは月あけたり船橋

一河

川狩

川狩や舟の入帆の居るこころ

桃祇

簞釣

夕沙は簞釣う橋はきりり

東柳

雲雀

舟存もこころやし暑し練雲雀

千松

越雲雀

途もやまのあやけは海より

振鷺

火取虫

追うねりも方持るまやと火取虫

雲鳴

蝉

すゝも虫 蝉諸声

空蝉

奥義抄曰空蝉ハ脱売と云うはらふ生まると云

蟬の鳴り	脱けし蟬の亮るる楮の柳	★藤紫
毛虫	拭きし光るる窠や塊印し	五声
竹皮脱	蟬の鳴りしはくくぬ毛をうか	静江
百日紅	うつりり花のさかすか	除松
射子	いわなきのさかすか	三川
麒麟叫	白蓮や夜明るる水は池の香	成淵
蓮の花	たもとくや夜明るる水は池の香	九
沢田	水軒あり	
赤草	を鳥やささくくもくもく	露橋
盆顔	夕の月や輝く朝も雲は花	とく成
夕良		

瓢の花	瓢の花	錦鳥
于瓢刺	新于瓢	
凌霄花	のこも人のむらうらう	女中
風蘭	風を葉や雲のまき居る岩は花	山奴
虎尾草	人あつぬ虎の尾草や井の底	野添
眼皮	暑あつぬやけぬか人	挑寒
鷺叫	鷺叫のさかすか	挑寒
釣鐘草	さかすか	挑寒
葛の花	葛の花	挑寒
楮の花	さかすか	挑寒
綿の花	さかすか	挑寒
蒲穂	蒲の穂は土より	挑寒

四草取	石の妻と多れり田州	玉魚
蘭新	多れ子と追也	呉仙
菅新	藍新 白麻新 麻新 櫻麻	
音田	美多の雨とまらぬ音田	音田
かひ	奈良のしと織糸作	
麻	麻新と夏	
夏引糸	夏引の糸縹の糸	左角
茗荷	ちり塚の向ひや	也江
音唐	音唐の細さ	桃等
小角豆	人も未ぬ山添	桃等
菰豆	枯作のいん	羽田
音鬼灼	浜松のあ	里時雨

紫蘇	呉子の穢うち	葛栗
莧	風とまの日後	春蝶
瓜	中らつて	石二
林檎	夕月や	漱石
奈良漬製	納豆醬油	
夏切糸	夏切糸	山口
麻地酒	和漢三才圖會	
水飯	水飯	
葛水	葛水	亀文
心太	山の端	桃支
沖鱈	研土	麥塙
芥子	海藻	鶏冠のり

簞 窓あり小室席の香やたうひら 芭蕉
 抱籠 抱籠の用は妻きまこころ那 伴忝
 竹夫人 傾城の抱夜と淋し竹夫人 山奴
 霍乱 香霈散 香霈と斗も夏あり
 夏より 炎暑中頭瘡の發しを云
 雨乞 雨乞や川よちりしおちり帯 桃霞
 夏深し 夏ふりし草よ埋する糸の糸 一鳥
 秋近 秋近くくくねく涼しや峯の空 五悦
 夏のつら 夏の泉 秋と隣 秋と待

秋之部

七月

少皞帝 蓐收神 昊天 白藏 金商
 庚則律 立秋節 處暑中 孟秋 桐秋
 相月 蘭月 文月 女帝花月 親月

初秋 えるらもちよ四ま山暑し今朝の秋 三 桃隣
 残暑 秋暑しいはれ暑し柳 桃翁
 葉 我名の淋しさとちこく桐一葉 芭蕉
 柳散 物凄き姿えちやちり柳 春蝶
 施餓鬼 一日ちり十五日ちり
 北野御手洗 六日社頭のすくきハ七日あり
 撰待 茶を以末の人飲も魂祭の月其うほぼし

杣硯洗

灯籠

踊

七夕

秋衣姫

提葉姫

男七夕

秋衣

紅葉橋

百箇池

願糸

飛鳥井鞠

六百童の杣硯と洗する北野の神事習ふものなり

盆踊りハ秋あき口の灯籠うね 嵐雪

七化の果ハ明ナリおどり 徳布

まゝ泥くえや七日の天竺川 挑翁

薰姫 さの姫 百子姫 糸織姫 朝顔姫

二星 牽牛 織女 大飼星 河鼓

女七夕 どり妻 牛女 尾契 星合

天の川 銀河 星河 銀漢 烏鵲橋

年流 彦星 乞巧奠 西淚雨 七箇池

妻迎舟 妻越舟 七種舟 星祭 星年向

星薫 庭立琴 星の宿物 楳の葉 芋葉露

紀事曰七夕飛鳥井家并難波家子蹴鞠の會恒例也

池坊立花

本願寺薔花

七日御節供

逆の峯入

文珠會

六道衆

積賣

清水寺詣

盆市

中元

魂祭

聖靈棚

七日洛六所堂より

七日草花を以て色々の作物立花なり

内膳司より是と調進と公事根源委り

本山ハ七月當山ハ八月

八日東寺西寺より行ふ

九日建仁寺の南より聖霊迎ふ都人衆りて鐘撞更なり

同日六道衆リよ求めて魂祭冥前は供也

九日盆詣四方六千日ありともいふ

盆市ハ出りておどりともいふ 桃雪

十五より

きのふえい一人や隣はさうはつと 其角

棚經 掛とめん 麻が著ホ

墓祭

一家の如枝よあつた墓生糸

芭蕉

嵐尾押

こころをきくや小川よ白き花の如

春蝶

生身魂

此世よ父母持多人生身魂して祝ひ侍る

蓮飯刺籍

中元生身魂の祝用あり

三井寺女詣

十五日常の女人不詣今日より免侍る

夏書納

夏にづいて後是と堂塔伽藍を納る

夏解州

秋氏要覽曰浙右の僧解夏の日縁として師とぼつてのく檀越

贈るよふ

水灯會

宇治川船中修之水中施食の法事あり

送火

おくりやよかしのゆも妻おれをくむが 羅風

施火焼 大寺火 十六日紀事白今夜東山淨寺の上は薪取て冬字と良也

鳥居火 十六日愛宕山 船形火 同日船固山 妙法火 同日北山松崎

五蘭盆

うらみもや 悔く嵐の嵐あはれくむ 桃翁

經木流

十六日經木の面は法名を印し四天王寺に龍井の水と手回る

間麻鬼参

同日 八幡安居頭 十日 今六十月十五日あり

はく入

十六日伊勢山田よりはくの出立あて人のぬきつて入見度物と云

新綿

十六日内裏へ綿と書し

御靈御出

十八日八所の御靈の世諺問答と云

雁鳥出

藻塩州よ鳥屋出の雁鳥七月十六日と云

雁鳥山別

廿五日雁鳥の巢を立て父母と別ると云

雁鳥打

雁鳥と云と云

荒雁鳥

小雁鳥 このりくたささしハ 鶉雁鳥 と云と云

鳥屋勝

雁鳥新毛生羽翼全く備り鳥屋を出し付勢と云と云

初雁鳥狩

雑談抄よ小雁鳥狩ハ少く替り有と云と云 万葉新泉よ差別あり

鷹鳥祭鳥

月令目鷹鳥乃チ祭鳥

愛宕火

攝州愛宕山廿四の夜種々灯籠火と幣トイ祭

地蔵祭

廿四日 御狹山祭 廿七日

穂屋

穂をばらるる尾をわはあや山田 南露

相撲

子と抱くりりるやと角カ 存義

こゝろ使

国へ使と下し角カと召まよし公事根源と有

鳩吹

奥儀抄攝師の鹿待し人し鹿有し思をまきと食吹鳩吹云

花火

川原に並みと見城も花火に 積羽

ひやの

ゆちも水ぬりりり 其毛

扇置

扇もあはれもあはれ 雨夕

稲妻

稲妻や湖つらめひて志望の松 素勢

糲米

やきまよし流し今もこの稲穂也 北調

田畑虫送

年よりて穀や虫のはきと粘んとまの時風是と贈る

檝拵

楓 塩櫃

萩

萩をひきて萩のうらな夜うら 雨夕

秋海棠

七枝の一又流しん 秋海棠 梅人

藤袴

藤袴の流しん宮女の裾や友袴 挑瑞

蘭

葉の多やたれ去用の下小袖 百和

朝顔

朝顔の多やたれ去用の下小袖 杉風

桔梗

桔梗の多やたれ去用の下小袖 春素

沢枯梗

沢枯梗の多やたれ去用の下小袖 山雨

女郎花

女郎花の多やたれ去用の下小袖 挑明

花はとらの

女郎花に似て花白き男へ

仙翁花	観音草	益母草	うらの花	曼珠沙花	蜂腰草
翁草	菊	ハハ	もろぎ	白	紅
第切草	鷹の良菜	あり			
鳳仙花	竹	寺	静	あり	ほ
ハハ	た	ら	ま	よ	ま
野菓	う	ら	く	と	觸
若荷の花	お	の	け	て	又
交花	や	い	と	花	も
は	ら	に	や	け	く
蒲萄	月	の	夜	と	い
紫首	や	ま	り	て	實
くさきの花	虫	と	ら	う	ま

木槿	乃	は	ひ	ま	り	馬	よ	ら	り	も	り
桃子	木	瓜	の	子	也	波	柿	波	取		
槐花	花	の	ま	く	も	ん	ど	や	ち	ま	一
蓮實飛	蓮	の	実	は	あ	や	夜	明	の	鏡	口
刀豆	あ	く	ま	や	葉	と	も	も	る	風	の
名顔寶	よ	く	利	め	夕	兵	長	一	何	と	也
青懸草	風	ら	ま	一	萍	の	名	や	青	あ	ま
西瓜	散	ち	舞	え	ん	知	ら	る	西	瓜	の
粟穂	粟	の	穂	は	む	ら	の	細	も	と	ヶ
稻穂	貞	徳	云	筵	と	舞	ら	る	稻	の	面
稻花	と	稲	ひ	ら	と	よ	も	も	り		
富草の花	早	稲	新	米	稲	荊	子	扱	稲	舟	

室のくま早稲

江鏡内ぞ萬代の床と室とらふまゝ又八重垣と室とらふ稲の
名ありとあり

二百十

ま春の日にう舞うちも口とふ

秋風

かろくくく抜るる葉や秋のこを

林風

初嵐

吹崩れも古稲塚やとらふりし

五声

蚕

声さひひく月夜道きりくも

音露

蟻

かろくまきや糸の出口は持たぬ

田太

とくぞり

稲菴 蝨 蟻 蜘蛛

田太

虫

火と焚くく小五つ夜や虫の声

桃雨

鈴虫

松虫 響虫

桃雨

蝸

木の日くくくやあふ下木の松は風

里風

蜻蛉

又まきくも一水あふ蜻蛉うね

梧井

残蚊

残る蚊のこくく鳴く雨夜うを

雨明

秋胡蝶

ちよひもき秋の胡蝶はいのちうね

石二

秋螢

水畔もくく流す秋のちきるん

挑宴

龍田姫

八重垣と秋と司る神あり

律の調

貞徳曰律の調は秋也

千秋樂

盤渉調曲也

霧

納まりやねくく晴るく海の面

桃隣

露

胡蝶をせけくちよひもき秋の聲り

樓川

身しむ

月 新月 其外月の美名本

推柴

推の葉 証

薄

まきくくけ古根よるまきすまき

俊似

葛葉

静ある葛の葉や面は静

占声

真鳥 忍叫 鳥 花壇 草花 花野 芭蕉 辨慶州 雞頭花 葉雞頭 雁來紅 茅首

赤松の留よりまきまききく
 又上るるやうやうやうの茶
 叫くは残して春の草か
 花壇と秋とすは秋の草花と愛もあは
 下りて居るも久しう叫の
 久しうは新や花は猫り
 寺殿くく残るも成り神の中
 一名イキナ
 野の草も味の中を飛下
 吹荷も瓜小を依り系お
 辨州子に依つては雁來紅書く百葉の以同物
 中より草の草 犬子草

其流 九川 桃野 山奴 全 挑南 挑如 挑窓

鬼灯 蕃椒 若煙草 布瓜 南瓜 冬瓜 薑 牛房引 芋 ヤマノイモ 菓 柿

ほろつきや妹々思ひの小石臺
 まくても有べきものど磨く
 女よはうききききひありま
 蔓まはらるるるるるるる
 何鳥の種蒔神くか何とや
 朝市は舟も多きまふら
 油沸くは芳村夕やこほり
 湖をまきとめや芋のま
 又カコ ツク子イモ スイキ
 紫舟の底にこぼるるの
 つり柿や隣子よふ夕日

桃從 冬仙 五声 中考 吳仙 梅長 冬英 故風 一棟 丈草

梨子

門並のゑん子ん事あり甲及皓

野流

田色

田庵 小田守 晩稻守

寒山子

ななりのうけゆるのそり

挑翁

鳴子

魂の窓うら通ふるふら

宗瑞

鳥に

唱等 引板 焼しり 涿水

挑先

木綿取

胡くけ事事葉や本終り

枝先

鹿

かき曇る月の夜休し鹿の声

挑祖

藤住虫音

八重垣我うら虫あり鳴とら秋あり

李明

蛭蛸鳴

みくも鳴く夜や夏より母の良

長古

葉虫あり

鳴とらくこのむかおし流の垣

支考

鷓鴣

半羽る声は暗しりタッくれ

宗瑞

鷓鴣

活居らうら世を記まうらうら

宗瑞

鳩

鳴く高れけのま梢くれ

挑隣

鰯

鰯約はものまじり鰯はり

半残

鯨

まはけりの双々出たり秋の海

孤雄

鱈

小まじり 江鮓 小鮓 さき勝

月しりうら小いり光る綱川くれ

知道

鰻引

晨朝の清きうらり縷や

石二

鰻築

八月

南呂律 白露節 秋分中 仲秋 竹春 壯月
桂月 葉月 秋風月 月見月 雁來月

八明 たのむの祝
繪行器

後深州院項米と折舖土器をよみて入て相贈し其公事根源委
後深草院の項より始りてより始りてのよみて米と折舖をよみて
相贈しといや今行器を菓とて贈り侍る公事根源抄に委

天中節

日赤口白舌隨節城と書て門を押し火難盜病口舌の災を除け

三村祭

堺の太寺
又作水村

二日 堺天神祭 四日 北野祭 四日

白鬚開帳

九日 敦賀祭 十日

待宵

はちや明日は二見入る若星 其角

名月

あかりや夜更くと水は花るは 素丸

十六夜

いよよひとくまのよりのせ ことば

司名

京官六位以上藝能とよみひ菜翁とよみ

放生會

あつみのまのつらや放け會 春蝶

八幡祭

十音 霍子阻祭礼 同日 筑紫守佐官祭 同日

志賀八幡祭

同日 筑前椿崎祭 同日 河洲譽田祭 同日

伊勢阿野津祭

同日 二連幡祭 同日 豊浦祭 同日

野口念佛

同日播州如宮郡教信寺より

駒牽

公事根源曰公卿以下次第は御馬とよみ

駒迎

毛羽よりい波まらん釣びころえ 其毛

菅大臣祭

十六日 御靈祭 十八日 東名祭 十八日

菩提菩薩祭

廿日長壽よむりて船の神を祭ると

西院祭

廿八日 秋宮 中宮の事なり

秋社

秋分の前後も近き戌の日五穀の神を祭る日也

後の彼岸

死活杖祭

初泣

野分

漸寒

初紅葉

礎

長夜

薄荷

名木散

牡丹根分

木芙蓉

蛇穴不入

秋奠春も同

昔ハ毎年ハ月祭ヨリ由職原北の陸ニ入リ

初泣ヤリ川葉流ル川邊ニミチ

中ノ者ヤ坂ノ沙汰ニカ茄子ノ味

改修下ハ拍ノ日和ヤ初雪ニモ

夜半リある。旅ノ里ニ入リ

ときき夜ヤ獨坐ニサ皆ツリ

菜艸あり和漢三才圖會ニ代烟艸吃烟

野山色

児分ニ送るほきんノハ根ニ

折ニ葉も又陸ニ似テハ本ニ

田太

猿雄

夫來

挑尹

宗瑞

挑窓

哥齋

思輕

木犀

桂花

梅嫌

金剛艸

檀特花

花紫

白粉花

烏頭

茹宜

紫菀

露艸

宇治花園

本セツヤニ入ル唐ツル

花ノツル寺ヤツル山ニ

葉ニハモル村中ニ入リ梅嫌

艸ノ上ニ葉ニハツル結ニ

たんにハ知ラズキ海流ノ

御傘ニ紫の花秋あり

花ノ取鳥甲ニ似テ葉ニ陰子

かろヤヤ川邊ニツル

ハハノスルニ近キ者ニ

仙覺抄曰鴨跖艸ツキ草ト和モ月草ハ露艸あり

ひろく人の洞や露の世と山秋の花雲 慈鎮

其角

桃嶺

思輕

挑雪

挑窓

青露

不水

梅人

耳の名多き也畧之

毛見 毛又の尻もまねく 佛一秋の星 九声

栗引 拒引

捨少めも急佛ト 落穂うを 故鳳

芥子蒔 大根蒔の葉よ 撮菜 間引菜 中枝大根

小菜 心一人摘み入りり 小菜 畠 越後 挑寒

雁 丁為を 濃田を 中りの夕日也 五百武

縮負鳥

古今傳授ありては知れし

色鳥

いろも けあふく いろく 山路うを 伊勢 山鳥

渡り鳥

胡阿ふし 天窓の上を とうりも 本末

啄木鳥

本は けきや 已く 幾を とうり 下鳥 茂尊

鶇

ひよも けきや ちき けき 伏見也 梅仙

掠鳥

ひよも けきや 飛吹 獅。 羽風 久 於 遠 桃 處

山雀

山うの けきや ちき けき 夜 伏見 仙 壽

四十雀

日雀 五十雀 小雀

鶇

ひよも けきや 在 畠 けき けき の けき けき 三 五 情

連雀

とん 雀の けき けき 唐鳥 けき けき 三 成

眼白鳥

梢も けき けき けき けき けき 和 菜

葉戴鳥

枯木も けき けき けき けき けき 故 鳳

ねあ

るり 鶇 鳴 ほろ けき けき けき けき

ま

えきや けき 鳥 額 鳥 いす けき 燕 扉

ひくさ

味 けき けき けき けき けき けき けき

初鞋

本川 けき けき けき けき けき けき けき

けき

味 けき けき けき けき けき けき けき

かいら
 大刀魚 落鮎 下り祭 ちの魚 ひーと 地定入
 滋鮎 新酒 新走 中級
 けけ生れ 貝まき ちの魚 具角

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

九月

無針 棒 寒露節 霜降 中 紅樹 季秋 栗月
 九月 長月 梢の秋 麻覺月 小田正月

御灯

三月三月の如く北半斗灯と奉らるる支あり

不埒目奏

七日諸国田の損亡を所と目録として奉り租税を免給す

桂宮相撲

八日桂の宮に六条の北西洞院の西あり拾芥抄

泉涌寺舍利會

八日此會式ありて終日舍利を拜せり拾芥抄

重陽

栗花宴 栗の節句ありて酒 九日の礼 栗酒

栗糍 栗菓袋 栗のきを綿 黍くハ公事根源あり

九月小袖

御湯殿記に九月節句ありニ云と云

後雜

重陽の雜祭支侍り源氏物語に尋常中も雜祭あり

ハイ運

紀元は九月九日童のちをまきあり

醍醐祭 九日能なり 御香宮祭 同日 鞍馬祭 同日
 貴船祭 同日 生玉祭 同日
 後日東 紀事百十日或ハ十日禁裏残葉の真なり
 四の宮祭 十日 下鳥羽祭 同日
 例幣 十日伊勢太神宮(御幣)奉ら給公夏根源(奉)
 御難餅 十二日蓮宗少て供之
 住吉相撲會 十三日寶の市(もり)拾芥(奉)
 宝市 子代り(奉)長(奉)一(奉)度(奉)宝市 春鯉
 白川祭 十三日
 十三夜 更〜〜〜子(奉)鳴(奉)く(奉)后(奉)の(奉)月(奉) 桃隣
 天手寺二葉會 十四日或ハ十五日六時堂(奉)修之
 岩倉祭 十五日 小倉祭 同日豊前 岡崎祭 同日

一宮祭 同日 神田明神祭 同日 勸學會 三月(奉)同し
 太祭牛祭 同日 山口祭 中巳午
 度會新堂會 外宮(奉)十六日(奉)内宮(奉)十七日
 穴藏祭 十七日 呉服祭 十八日 城南寺祭 廿日
 八幡花頭 廿日 婆利女祭 廿日 旅庚祭 廿日
 上難波祭 廿一日 淀祭 廿二日 座摩祭 廿二日又相堂(奉)今(奉)寫(奉)祭(奉)三
 本幡祭 廿四日 鹿谷祭 廿四日 逆髪祭 廿四日
 天満流鏑馬 廿五日 北山祭 廿六日 津村祭 廿七日
 鴨滝祭 廿八日 福王子祭 廿八日 住吉神送 晦
 野々宮別 源氏神の卷(奉)委(奉)九月七日(奉)斗(奉)と(奉)あり
 桂川御枝 負徳云秋也是也同卷(奉)十六日(奉)の(奉)夏(奉)と(奉)あり
 伊勢御遷宮 廿年(奉)と(奉)歷(奉)る(奉)時(奉)ハ(奉)必(奉)造(奉)燈(奉)宮(奉)なり

撰蟲
 雀蛇と成
 射祭獸
 菊
 紅葉
 白膠木
 かつら
 丹亦紅
 仙蓼
 鷄上戸
 南天實
 父ノの實

殿上人嶮岨野に棲ひて虫籠に虫を入れて奉る夏あり
 月令曰是ハ戌の月也候と記と飛物化して潛物と成九月の節と云
 同書に見へあり
 組葉もりぬる呼吸も九日一の耶 桃翁
 きよ山の紅葉あそんむる夕日よ 靜江
 取もけと漆のぬるそくの梢の那 古長
 是ハ紅葉中のちとふぞのむあえ
 ころもころも咲くや 嘉祥の夕日和 桃祇
 せんアアアアは浮き入りてき実入式 夫來
 うねゆりかみく漆のほろりて 和海
 南天は実ハかこふきぬ夕日け 其毛
 大和本州日漢名不知桂のふあり

白角
 くらげ
 おりの実
 桐油實
 栗
 八宝
 無花果
 標
 新推
 新ちり
 水木

さくらうらまき風若し秋のまれ 思輕
 菩提子 びらり 棋檀實 榎の實 とらつこ
 とんぎんのこ 椿實 標實 どんぐり
 和漢三才圖會曰江及濃及多くわし油と云る
 栗 栗や 秋明の宮よ 兎の丁也 桃尹
 時珍曰栗中て小き形也
 いちりりやあつた毛び西日ら 桃徒
 大和本州日標とも作らる標の意をや
 駿州に多く有り
 新胡桃 推實
 青松並と大坂俚語と云んちりり
 和漢三才圖會曰白木山中より出たり

葉蔓

佛手柑

雲列橘

蟹柑

紫あら

藤取

色久ぬ松

山粧

うし枯

薄散

破芭蕉

芦の穂了

あうらみーくし白あり牡丹の如

和漢毛圖會曰其樹似柚有刺

大和本州日温州橘其葉密橘に似て薄く小きなり

葉かくれよちく色若し青みうん

林檎の如く花白く緑色あり

ふむけ外も赤れくうりーし

雲斗りえの色あり秋のや戸

野山錦 草色錦 枯野は色結るも

うし枯や足のかくくわし川

ま〜ま〜ちる日や蟹あかの葉若き時

朝古く垣もも成も破道きり

下よ〜〜吹ぬる芦の穂〜〜ぬ

桃從

千松

雁戸

木水

静江

知道

桃窓

桃從

豆 りんぎ

新着高冬

遅稲晚稲

ひつち田

霜踏鹿

露霜

露時雨

鱸黒漬

崩魚菜

網代打

番綿番船

九月盡

緑豆こわ〜と引秋

新そはのよゆと花の白ひ式

肌ま〜〜にくの叔指タアア

ゆのち穂や海苔のほち〜〜ぬ

尾越鴨 紅葉鮓

中川葉よまぬ霜とけ。朔うれ

明の井の菫乃あ〜まをりり

豫州の産あり称宇和鱸

流れれま〜〜ゆる。浮きあや萌菜

流れ〜〜ゆる。養を長き〜〜ゆる

大坂あり江戸積出を綿あり其廻船よ二番三番三番あり

南天は実よ野や九月 素丸

青露

清々

百和

雨朝

静江

一刀

山鳥

素丸

行秋
冬近
冬待

行秋や茅のちるまの秋は風
冬近き柳や尾上の時を
冬待や更なる屋の後松系
古川
一斗

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

冬之部

十月

顛項帝 玄冥神 應鐘神 立冬 小雪 孟冬
折木 上天 玄英 羽音 律檀 陽月 良月
小春 時雨月 初霜月 神無月

更衣一日

夏の申装束と撤して冬のも改より天皇南殿に出御
節會あり是と孟冬の旬といふもあり

神送川

神おろり荒くく 宵に去大根 酒堂

神の猿

神の猿 尾勾の端とありとあり 其角

神の笛子

神の笛子 尾の末にありとあり 全

燧糟食

一日唐より荊楚の人食之

進炉炭

一日唐より有司燔炉炭とて民家より酒を暖るに燧糟會を

まじり

拜壇

唐之都人墳に詣り變を尙祭中も馬車まで陵を朝と暮を待たせ

炊開

炊切の手もや牛よいのきやうの状 素丸

玄指

おの葉は下砂もあつらんかのこた 其角

射場始

三日と左右衛門弓場の棚をはく天子射場殿を出ると

公卿以下束帯めく是と射る

残葉宴

菊花の宴は九月九日又残菊の宴は十月五日群臣詩を作し酒を

興福寺法華會

九月三日より七日の間南圓堂に妙法の大會を興し是は八月

六日長閑大臣内膳の御忌日のあり

維摩會

十日より十六日まで興福寺にて講し十六日天織冠の巾着日と

金毘羅祭

十 讃岐国鶴足郡象頭山

下元日

十五日あり

水官解厄

水官主祿百司人間の禍福善悪を聞きて天關を叩て厄を解

東福寺開山忌

聖一忌とも十七日あり十六日より通天の紅葉見あはる俗人

年中好後の終あり

御取越

一向宗私身より親鸞忌と修む

達磨忌

達磨忌や悟り形りの岸は松 枚露

十夜

夜ももろろ小豆煮立之十日の夜 静江

芭蕉忌

芭蕉忌や菴よりあふり松並 桃玉

御影講

袖も枝もたうをねこよりゆき清 泊圃

夷講

ろひら清歌うら子袴もあふり 芭蕉

誓言文拂

京極四條に鎮座奉世所謂此神ハ誓言文起請赦免の社と云ふ

大社神事

出雲国神門郡杵築村より神集十日より十七日まで齋と称

神集 神在

此間風とゆき波荒き日より龍蛇化度藻は葉して海上より

法勝寺大衆會

南禪寺の西北新黒谷の南へ廿四より廿八日まで

茶ノ口切

口切や葎をくくく白のおと

五悦

冬され

冬されや梢に残る枝にのち

桃五

小春

冬され一石二露くる小春うら

桃處

初霜 消トキ

初霜や苔のうきなる石灯籠

玉簪

初時雨

後人と我も呼吸せん初しうら

芭蕉

時雨

涙しき斗り養王の付ぬこり南

傘下

霜柱

清け居る赤上岨や霜くくくら

桃李

初雪 消トキ

初雪や筆持山に右にきり

桃翁

初雪見象

昔初雪の降日群臣象内へ侍と初雪の見象とヤリ

初氷 解トキ

絨繖の胡麻もるらうりくく

木水

冬牡丹

時雨ちく壑り此茶や冬牡丹

一步

犬莖花

岩山の雪や清りの花さうり

木水

寒菊

寒菊や寒き度や枝の下の

全

ハッ手花

梅の葉や葉うけのする輝け光

兼之

茶花

山茶花や日向け葉の枝は花

挑徒

山茶花

二梅とく咲くぬ本珍や入り花

左来

扁豆花

枇杷のちれ咲や山家の朝烟り

五悦

枇杷花

多仙や秋穂枝る葉のちれ

花曉

水仙

多しとくる洞や清くしる紅葉

芭蕉

散紅葉

葉うけや家あき過の二地葉

燕尾

草枯

木枯や富くかきく涙の去

如豹

木枯

くく花生の子枝鳴く秋葉毎の霜

挑徒

鶯の子鳴

霜 雪 雪吹 雪團 氷 氷柱 垂氷 霰 炭 炭竈 滑

淡火の雪の影り霜夜のり
竹折る音のこぼれや夜の内き
明く子細や雪吹の小庭裏
道場は柳蔭くわりのまをまけ
曳舟はくまぐさ草の休う那
明くは谷石のりる氷柱のり
そまの精の居る枝了る氷のり
櫂のまよふ氷舟のりるまをまけ
捨れ花ちりるまをまけのり
山里や炭がくわりのりるまをまけ
炭のまよふ雪のりる山は銷煙り
櫂の火に名のまのりるまをまけ

山奴 下慈田
野逸
挑水
静江
花隣
挑三
挑夢
若人
知道
挑祇
紫色
冬嶠

冬嶠
三

巨燧 火桶 湯婆 衾 蒲團 頭巾 足袋 綿子 紙子 牙月 鐘子 寒

かきけらるる宿や旅癖の玉巨燧
利くくの繁らるる火桶式
裾きく人多くは冷るる月の澄
垢はく世話ぬき紙のまをまけ
席くは流や巨燧かき人のまをまけ
湯老のまをまけ病るはきんりね
足初る女は足袋と襪をまけ
獨り居る尾形かき紙子うね
脱けく猫の癖はまをまけ紙子式
方明の母より話訪のまをまけ
待てくは流波や今箱の小おし
古比よまをまけまをまけの寒う那

挑一
春蝶
挑夢
田太
其角
五挑
蓼太
挑居
挑長
兼之
遊翁
文挑亭

麥蒔 蕪 大根 胡蘿蔔 蕎麥刈 葱 切丁 干菜鉤 枯芦 枯柳 枯尾花 枯野

麦よりきりや戸造まる西日向
石二 斗賀
舟積の大根ふー胡の雨
挑蹊
あんちんの葉へ英くみりう畑の縁
花山
そはうりや一雨さま松の下
挑霞
葱は香や小五路の口の香き清小玉
喜久
きり丁や日注のそくぬ谷の家
山奴
牛藪の根ももきりり為干菜
春蝶
うれ芦のききりのや浦の月
挑祇
淋しうやうれむせよちる川柳
挑水
中くま雪よはばよーうれ尾さる
和溪
夕月よハのりゆやうれ野系
挑長

冬 四

木の葉 落葉 冬野 鷹 鷹狩 隼 鷹近 又スツツ鳥 おく人 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹 鷹

山川よ流るる早き木の葉ふりれ
挑蹊
ト夜ゆて山河くハゆる落葉あう南
挑谷
寺の表くく入る日や冬野系
風馬
夜まのりりや日お入る系よ人の声
挑暉
五暗
鷹狩よおれや神おは隠まるもひそく立よ
鷹近 追鳥狩
鷹のまを追むもまの草あふ
たうれもまを放まーとつむ料あふ
まのまをまひりて替人のりあ

列卒繩
狩杖
ぬくめ鳥
鶯
鴨
鶺鴒
水鳥
浮寝鳥
千鳥
氷奠
柴積
網代

鹿狩は縄と引く藤と遠生もさる遠き持あしよ
狩杖と引く持杖と
氷は信むるさくろをぬくめ鳥 文鬼
鶯ニツ 魚の月新かー比け西 石二
鴨のる門田や夜まの音の音 ^{上藤} 桃支
掃く海へまゝくもももも 鶺鴒 燕尾
水もや淀り取の右にりり 桃賀
風多くく浮床のまけは夜る 全
豆中のちりりや破のりれ 畠 ^{三世} 桃隣
遠山よりくさくさぬ雪や氷奠 取 松端
水中遠生と積奠寒とさる其裏よ入まを以て用て是と取と
枝の露は細代りおろし 旭 ^{上藤} 桃支

冬
五

竹筍
夜奠引
生海氣
鱈
石花
河豚
鮎
鯨
納豆汁
蕎麥湯
綿
冬籠り

竹と曲、葉の空と蒸く奠とさるもの
冬の夜中の獣と獲るよ犬と引と
魚よりとりとりあり生海氣舟 ^{上藤} 桃支
糸拵もと舟の小室や鱈一本 桃中
石花よりや赤き日の出は潮より 桃躑
朝よりけ雪を忘るよりわく汁 燕尾
細き灯は江も静ありいさく舟 桃中
緑なる浦もゆきくや海さ日新 翠羽
女房とらー海合や納豆汁 桃徑
よゆくと雪のまを汲きは湯の如 素丸
州中や夜むりり步ゆの音 桃雨
家古よりい葉の冬あり ^{三世} 桃隣

冬攝
冬月
冬
未鬼
神迎
冬櫻

落のしるし ちと扱ふ人おけ多かき 其角
木守りの付ありありき月の 呉橋
くれきくぬ草薺のはつや冬未と 桃
本鬼は枯木ありあり 桃
根元の吹流めもり神ひく 冒
今うとよ油と志のやみささ 挑
挑

十一月

黄鐘律 大雪節 冬至中 仲冬 周正 復日
霜月 霜降月 神樂月 雪具月

曆奏

中勢省より明年の曆を奏す

朔旦冬至

十月一日の冬至の朔を以て十年に一度の豊年あり

一陽の嘉節

十月の二陽あり冬至あり一陽未復あり

添官線

唐の宮中の糸筋とて日張と呈る冬至の後より

印串

唐の印串とて七十二節を刻て其長短を分つ所謂一年

獸履襪

唐のくまの履を者舅姑とクツシトウツと奉

赤豆粥

共工氏の子冬至に失せりしが疫鬼とありり赤らぎきを搦

ゆへに是とらう

相嘗祭

上卯日 神主のく官幣とらふて行ふ迄比絶て沙汰あり

宗像祭

祭紫胸形社の祭あり上卯

山科祭

上巳日 平野祭 上申日 春日祭 十四日

杜木祭

十四日 當麻祭 同日 卒川祭 上酉日

梅宮祭

上卯日 當宗祭 同日 中山祭 同日

松尾祭

同日 大原野祭 中子日 園韓神祭 中世日

吉田祭

中申日 日吉祭 同日

右神社祭年々兩度あり又二季と定むべし

五節帳臺試

昔所の祭帳ハ五人あり常寧殿あり天子御覽あり

五節ハ中日

帳臺試ハ寅 御前試モ同ト江次第あり

殿上淵醉

中寅日 調詠今様あり又三献ハテハ舞ありと公事根源より

狩使

是ハ五節の町に給りてんありよりの雉牟とあり

童女御覽

清凉殿ありと御覧も

鎮魂祭

此祭ハ人の魂の難れしを招き身中には給りて功能あり

新嘗會

中卯日 此祭ハ今年初の稲と神より義あり大嘗會ハ

御代の始に一度あり

豊明節

中辰日 新稲と神より給りて君もまじし臣も給りて

日吉臨時祭

中申日 建曆三年十月十八日より始る公事根源より

加茂臨時祭

下酉日 此祭是あり先兼日試樂あり公事根源より

東三條御神樂

下卯日 拾芥抄より

小忌衣

山りの袖 舞人の衣裳あり

日蓮草

此の草より新嘗會の時がらみあり

日蓮系

草のひたしよかてりて糸もく髪質袖よなるあり

神樂哥

大草會の時近江のサカ田郡より翁の黍子て指と巻

神遊哥

その付たきと謡あり

阿知女

日本記梁塵秘抄等よえり

庭燎

神樂の曲はるあり

採物哥

サカキミテラウ 杖 筥弓 太刀 鉾 しサコ 斤折

韓神謡

諸拳 葛 弓 取物あはらりよの歌とて

大前張

梁塵愚按抄よカラカミの宮内省よほす久韓神二座と侍

小前張

宮人 エウテ 十二カダサイハリニガトリ 井奈野 ワキモコ

千歳早歌星

キリリス、トクセニコ エウツルヒルノ 弓立 アサクラ ツク

冬八

御火焼

へツイトウタ 酒殿哥 右神樂ウタ皆季とくあり

新王津嶋由火焼十言藤の南鳥丸の西衣通姫と和哥と守らるる神

吹草祭

おほくまや 松ゆはりハ山と唱 浮生

冬至

くまや 吹草のみ 那 素丸

子祭

まきまき 舞 舞のまきまき 翠羽

三鳴酉市

子祭りや 斤木より葉のまき根 桃處

里神樂

本の葉焚く釜のまきりや里神樂 山 奴

顔見世

の月又世や 堤吹り 氷人 桃葉

髪置

髪置や 春経のまきり 新石

袴着

袴着や 我子よ 腰のまきり 桃戸

被初

紅葉えり 葉をハハハと被初 桃條

道祖神祭

空也忌

鉢中忌

穀忌講

大師講

御祭

後日能

掛鳥

守賀祭

山神祭

誓り

冬至梅

十六日横津天王寺願より

十日より十一日十八夜清くくも曉くくも存

係多結くくも夕くくも夜くくも素堂

油火くくもくくも明くくもや霧忌忌 桃種

何の何くくもあれくくもあハ大野遠 如斯

廿七日南都春日の神事あり是とほむとらくくも

春日の祭翌十八日持樂ありとらくくも

九條東洞院より主五穀神

社の辺に樹上を幣と切つけ神供を焼く焼く

誓りくくもや葉のふき 祈りき 桃雨

あふくくもあけり加減やあくくも梅 新右

雪か

雪車

雪沓 細貫

積

初深雪

雪をのき

舞きくくも 野町やまこり 桃祇

牛一ツ雪車の跡り山路のれ 桃榮

はかめきくの跡残りちもの 桃賀

かへきとくきくくも湯より後庭式 桃夢

室へんくくも文竹くくも砂 静江

水傘曰くくも時雨の風の時くくも雪の跡くくも

あきくくも又通俗志の雪の跡くくも日積りくくも

くくもくくも

羅山子曰銀竹の雨あり氷柱と雨と表流あり

雪垣 雪芋 雪杖 雪礫 雪佛 雪く部畧又

薄氷 厚氷 氷の声 氷花 氷衣 水面鏡

霰酒 霰地錦 霰釜 氷く餅

菓喰
鯽
杜父魚
寒苦鳥

乳のまろぬ月をかこちりく菓喰
鯽有る、磯のあき濱の舎り式
霰のつる付あまあり秋晴河布と同類
此鳥夜の寒ささやみ夜啼ふあが菓喰らんとさくちり
日本中華あまあきさるあり沸經よ出ッ

凍

凍上る門や折るる山牛房
証 桃雨

室咲梅

室のひえ 桃從

太山榕

文字あみみやまをまきの葉は秋 桃賀

新生姜

雨舞る夕暮よ振る新生姜 桃祇

新丁燕

あもきくぐて茎干は淡やを新丁燕 大夢

十二月

大呂律 小寒節 大寒中 季冬 臘月 涂月 朔年

急景 窮月 窮月 霜蟾 春待月 梅初月

乙子朔日

人乙子あき者あきあり

忌日御飯

公事根源曰六月は同じ

大神祭

上卯日四月はあき

天智天皇御国忌 三日近江の國崇福寺あき行

御體御卜奏

十日六月もあき明年六月もあきのと白て其方の神はあき

あき祈りへきくもあき

月次祭

神今食 十日六月はあき

臘八

腸とさぐりくくあき 鮎 夏汁 許六

由伝石

あきくおほりくあき 由佛 忌 本末

かつけ給

佛名の尊勝と賜あり

拓梨勸孟

律の國のやがの左にみきと奉ふ仏名のしきあり

御髪上

下の午日お人御髪に刺しうらと賜りて焼くあり

幸童像立

大寒お日夜半に陸陽師土牛童子の像を四方の門に中央にお立

荷前使

十三日此使立車に大神祭の後立春れあり吉日と撰はし

著駭政

五月に同ト

内侍所御神樂

天子内侍所小行車より御拜りり刀自祝詞ありけるあり

最勝寺灌頂

保安三年十二月十五日於當寺施て行る

大徳寺開山忌

開山真禪大燈因師の跡を賜建武二年十月廿二日遊

齋宮繪馬

伊勢齋宮の樹下道のかたわらに祠あり晦日夜里人繪馬を描

和布川神事

そのとよし和布川に藤の火の光 桃雪

追儺

追ふるもや服もくもく鬼の面 荷分

築和甲鯉取

このりともを陸鯉の五所あり

八日鯉取

北国の川はまきとあり

大原雜喉寐

昔節分の夜男女あもりて通夜をくも

罔見

枝木より何を思えは鳥う那 柳門

年終魂祭

報恩經に十二月晦日の午時を来りて正月一日卯時をくも

星佛賣

人を明年は星を祭る人星の名并守護したる不動大日等の

佛名を書て賣りしきあり今も京におあり

寒梅

寒中より春へんて竹の子出る大きありは余もくもくあり

孟宗竹

きく梅の日向より谷をくもくあり 桃水

臘日大蜡

嘉平清記 説文曰冬至後歳爲臘燭寶典曰臘者祭先祖蜡者

百神同日異祭也風俗通曰夏曰清祀殷曰嘉平周曰大蜡漢曰臘

臘枕同札

節分の夜もくと云獸の形と画て枕もくと悪き夢を見まると

煤掃

まじくもきや山風うけて吹通す 丈州

こゝろ熱

鯛味噌鹿賣 豆齋菊蕪氷 寒晒 寒造

寒聲

まき声や刃と反らりし梅の上 素丸

寒垢離

響りの色氷分るる襦もあめと 桃夢

寒念佛

堤のしづか我かけききき 寒とふん 桃戸

年忘

咲梅の日向し年ととまされり 世 桃隣

年籠り

年とらりし世へさあすの野きき 梅人

古曆

今あしき朔寐を病や古曆 桃鏡

曆景 同卷納

札納 門松 替

米洗

道くもく氷の氷りり米洗ひ 桃李

餅舂

有明も二十日は追しきし若 若雨

餅花

もち餅を折る門の柳うね 若雨

節分

花よりけきや梅も赤いなり 柳屋

土條天神談

勝の餅おけらと求るるなり 伊勢

柗賣

降るる雪もあめきり梅りり 桃戸

柗こ

誰のあて梅こりり草の庵 民玉

宝船

判さるる布袋の寒し家あめ 超波

吉田大綾

節分火炒り火焼るなり 利合

除夜

下あきり啼るるあめ除夜の雞 利合

分歳 大年 除年 晩年 守年 いぬ年 年終 歳末

行年

川もやあまの藤層の後日 記 完來

歳暮

月もよこすもあまの年れれ馬 下 後蘭

師走

朔のるる貝割く瀨の所を式 世 桃雨

大晦日

大晦日しづかつむ老の巨燵のり 素丸

年ノ浪	年ノ漆	年ノ岸	年ノ泉	春近	春上待	厄塚立	厄掃	鶺鴒始	衣配	節季候
年ノ浪のうりや酒香の小さいる	敷の帆は霞のや年々大漆	入漆もる船の帆白く白の岸	風名さるは舟よりか年々多式	又くは小舟や風の成り馬	またらうき有明月や掃の声	また結ん伏見の翁の川口り	節分夜吉田神祇官のそ行	沼飲んし声あり夜まの尼掃	松賣りと連之門や衣々々	節季にや弱りて帰る敷の中
梅年	山奴	桃飛	文來	薛江	桃隣	徳布	熱尾	頂松	尚白	

冬 十三

年木樵	年の市	年内立春
にりし海き道うみまけし年木樵	股くする童ありきりては市	年のうちよき家獨産きり
桃隣	大夢	折居

冬之部 終

公の御
 下は
 平の市
 平本船

中

跋

識於る氣多末之石此はく用也
 之の如砥石もまじくあつて
 海物くふ旬ふまのさるものあつて
 其のまじりて清浄なるさるものあつて
 其の清なる時ハ其のまじりて
 其のまじりて清浄なるさるものあつて
 其のまじりて清浄なるさるものあつて
 其のまじりて清浄なるさるものあつて

お白雲のねんまゝにさへお別れし
たる後句をさし響くは月夜に櫻を
結ぶ詞も其志を伝へたるは
篇のさのさよふ人さへ多し
あはれしとてさへさへ
さへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへ

魂魯さへさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへ
其志をさへさへさへさへ
さへさへさへさへさへさへ

東武のり

如是度徳希

戊午陽月



白堂 挑雨

松旭舍 靜江 校合

北總 油田

山奴 著

太白堂 藏

終

享和二年^{壬戌}夏四月再校

江戸大傳馬町二丁目

大和田安兵衛

江戸麹町平川町丁目蛤店

衆星閣甚助 板

東都書林

拾 77

